

1月

【収藏品紹介】
交盛館編輯所著『草花盆栽培養法』(武田交盛館発行 明治40年)

本書は、園芸の培養法を一般向けに記したものです。「第一編総論」で娯楽としての園芸について述べ、「第二編栽培方法」に就ての心得「では肥料や土、接木など園芸全般について説明し」、「第三編草花培養法」では花壇物の草花について説明し、「第四編盆栽」に最もページを割き、「第五編蔬菜及果実培養法」で農作物について触れています。

今回は、本書の特徴を2点紹介します。
1点目は、家庭の園芸として盆栽を捉えている点です。明治30年代に「家庭」と「園芸」が組み合わされた「家庭園芸」という語が誕生し、団らんを目的として園芸の領域に浸透していったとされており



『草花盆栽培養法』
(武田交盛館発行 明治40年)

り、本書もその流れを汲むものと考えられます(本誌2022年6月号参照)。
そして、「はしがき」で「家庭の読物としての盆栽! (略)盆栽は趣味の中に詩的快感でふことを含み娯楽といふ間に徳性涵養で心理を有する以上は、正しく家庭の読物たるに足るべき価値のあること」は言はずもかなである」と書き出していることから1点目の特徴を窺えます。

また、「第一編総論」の冒頭の項目に「家庭園芸の娯楽」とあり、園芸は「即ち学理と技芸を用ひて吾々の賞味する果樹、生活の補助に無くて叶はぬ野菜類、目を喜ばしめ花を楽しましむる花卉盆栽の類を、繁殖培養する一つの業務のことを云ふ」として、盆栽を園芸の中に位置づけ、園芸は「趣味を感じ利益を得る以外に精神を爽快にし頭脳を明晰にし、健康をしてより鞏固(きょうこう)ならしむる」ものという利点を挙げ、「直(むべ)なり晩近家庭に於て一つの娯乐的業務として、園芸を行ふことの流行的に普及せる蓋し偶然ではないのである」とい

家庭における園芸としての盆栽が普及していることを示唆しています。続けて、「況んや此の事業(園芸 ※筆者註)たる専門なれば、兎も角も家庭にては、最も婦女子に適合せることなるを以て、(略)之れを行はれかしと切に勧めるのである」と述べ、担い手として女性を位置付けています。ちなみに、発行所の武田交盛館は、明治から大正時代の教科書も扱っています。同所から大正2(1913)年に発行された女学誘掖会編『女子手芸の菜』(国立国会図書館デジタルコレクション)は、家庭を支える女性が一通り修めるべき手芸についての

手引書で、一部分の加除修正があるものの、本書(『草花盆栽培養法』)の内容がそのまま「第十三編園芸」に掲載されています。以上から、明治後半から大正初期にかけての盆栽は娯楽としての園芸に含まれ、その担い手は家庭を支える女性と考えられていたことがわかります。
本書の2点目の特徴は、「第四編盆栽第一章総説」の内容です。内容のほとん

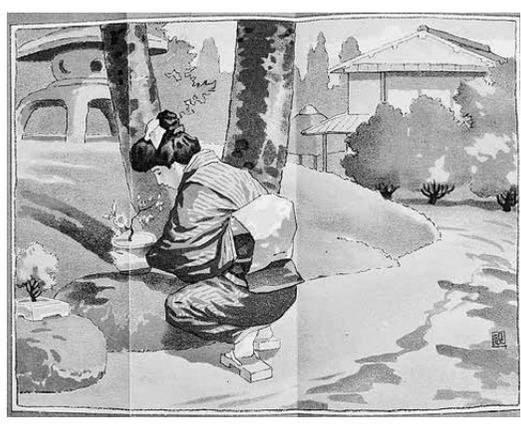
どは、盆栽の定義や種類、樹形、土、肥料など、他の盆栽関連書籍と似ています。しかし、章末にある「盆栽に付て注意すべき事」の内、「盆栽の価値(かちやく)」と「盆栽の台」の項目は、従来の盆栽関連書籍にはない内容です。
まず、「盆栽の価値」では、「盆栽の品柄に依ては、一鉢の値二百三百円、甚だしきに至つては、千円からするのがある、何んな点に価値があるか」と疑問を投げかけています。「盆栽の秀で、直打(ちくうち) ※筆者註)のあるは、樹に就て様々な自然天然の変化を、人工にてたくみに、而も天然に斯の如き変化を起したに相違ない」とより、思はれぬように仕立

上る「もので、「盆栽その物の凡ての容子が、中々に直打のあるものでも、枝や幹に鋸で挽いた痕や、鉢を入れた痕などがありくと残っている様では、その形が幾許(いくばく)上等でも、三文の直打はない」とい、盆栽の値打ちに触れていきます。
続いて、「盆栽の台」では、「盆栽物を床に直し、又は座敷へ飾りたりする時には、如何なる場合と雖も、そのまゝにて置かずに必ず相当の台を用ゆ、此れを盆栽の台とはいふ」と述べ、この「盆栽の台」には陶器製や木製(紫檀、黒檀、桑)を用いたことが書かれています。現在は、席飾りの際に、卓(しよく)と呼ばれる

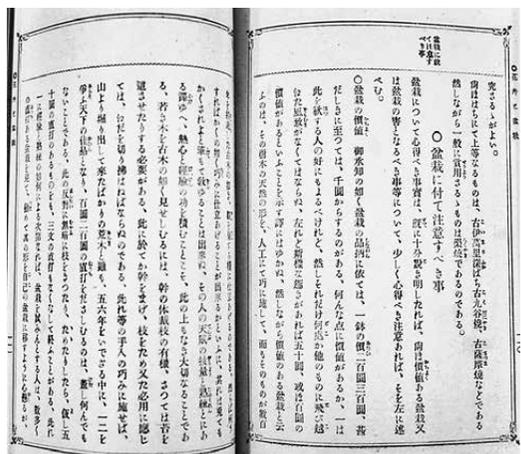
台の上に盆栽を載せますが、本書ではまだ「盆栽の台」と言っただけで、卓とは呼ばれていなかったようです。本書以前の盆栽関連書籍では、盆栽の棚についての記述はありますが、「盆栽の台」について言及していません。ただし、実際に盆栽を飾る際に「盆栽の台」を使用していたことは、『草木実験盆栽仕立秘法』(明治35年)など、本書以前に刊行された書籍の挿絵等に見られます。
なぜ盆栽の培養とは直接関係ない「盆栽の価値」や「盆栽の台」について、本書で言及されたのか。『女子手芸の菜』では、「盆栽に就て注意すべき事」が削除されているため、一概には言えませんが、

本書が「家庭園芸」を念頭に執筆されたことを考え合わせると、盆栽を飾って鑑賞する娯楽としての観点が持ち込まれたためとも考えられます。

盆栽の担い手は男性というイメージがありますが、いつ頃、女性がどの程度担っていたのか。また、娯楽としての盆栽(飾って鑑賞すること)が一般にどの程度浸透していたのか。本書は、今後の研究課題を提供してくれる資料と言えます。



口絵



第四編盆栽 第一章総論
盆栽に付て注意すべき事

(本館主事 立石見雪)